



竹本春太夫の像

春太夫が末期の時、妻の梅園は死に直面した夫の顔を寫生しやうとした、ふと眼を開いた太夫は『なるだけ男ぶりに描いてくれ』と注文した。（此畫像は攝津大掾家に所藏されてある。）

身の丈四尺一寸の着物を被た。六十一歳の還曆祝の時に袴を着て四斗俵をかるぐと差し

上げたそらだ。

越路（攝津大掾）や大隅が、役不足で往々江戸へ奔らうとするのを克く看破して、江戸に就て學ぶべきの師なし、大阪でなければ本當の藝は磨かれないと、屢々訓戒を加へた、それで二人ともに遂に大阪に踏み止まつたといふ話もある。

文藻の染太夫（六代目）

三十冊の自叙傳

寛政十一年生、明治二年四月三十日、七十二歳で死歿。三代長門の跡を繼いで文樂座の櫓下となる。

時代物の名人で、濃厚篤實、細心周到の性、自叙傳三十冊を残してゐる。當時の風俗、行事、時事の巷説、山水の景勝、旅行記事、が趣味的に記されてゐて、自筆の挿畫や、高山植木の標本などを貼付してある。四代長門の淨瑠璃大系圖と對比して、これは隨筆的な興味に於て溢れてゐる。

器用な性だったので、小細工物が巧みで、最負さんから貰った金封や品書の目録を、贈り主の名と共に切り抜いて、床本ほどの白紙の帖に貼りつけたのを保存してあつた。その帖末に金高の總計が上つてあつて、これが三年目毎に一冊宛出来る、生涯の物は勿論數冊になつてゐる。永久に冥加を感謝する意から、これを作つたのだそうだ。

豊竹三光齊

高野の山僧から出た

詳細はわからないが、高野の山から下りて來て太夫になつたのは事實。始め京都に出て素人淨瑠璃仲間で延玉と稱してゐた。大阪での初舞臺は文久三年三月、道頓堀若太夫の芝居で『猿曳門出諷』の堀川の段を語つた。體格が巨大で頗る美音、猿廻しは特に好評。二代目豊竹麓太夫の門下だつた。

床に上る前にグツと一息に二三合ひつかけて出るといふほどの大酒家。そのくせ、見臺に向つた以上は、扇を斜に構へて、身動きもしない、まことに行儀のいゝ語りぶりだ、朗々たる美聲を揺り出して少しも動かさず、ちつとも疲労をすといふことがなかつた。

若太夫の芝居で太十を語つた時、その大落しの聲が道頓堀を越して川向ふまで聞こえたといふことである。

以上の他にまだく名匠名星は群を爲してゐて

—— 四代目竹本綱太夫。江戸堀に住む、江戸堀の綱太夫、俳號四綱軒。美音家だが後に悪聲となる、而し名人。

—— 五代目豊竹若太夫。湯屋の三助から出たところ春太夫と同じ、始め黒治といふ素人。竹田の芝居の櫓下となつた人。